



2015年11月発行

## イエスの埋葬

遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。

(ルカによる福音書 23 章 53 節)

イエス・キリストが苦しみとの壮絶なたたかいの果てに息を引き取られたのは金曜日の午後3時頃でした。その時、それまでイエス様をののしっていた群衆も胸を打ちながら帰って行ったといひます。そこに何か新しいことが始まっています。ヨセフに起こったこともその一つです。

十字架刑のあとの処置について、聖書では、木にかけられた死体は神に呪われたものであるから、必ずその日のうちに埋葬しなければならないと定められていました(申命記21章23節)。ただ、その日のうちにとは言っても日没までです。いったい誰がそれをするのでしょうか。しかしその時、ヨセフという人物が現れて、イエス様のご遺体を引き取り、埋葬しました。わずか3時間ほどの間にそれをしたのです。

ヨセフはユダヤの最高法院の議員であり、同時に神の国を待ち望んでいる人でありました。しかし「イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが」(ヨハネ福音書19章38節)と書かれており、勇敢な人とは言えません。とはいえ彼が最後までそうだったわけではありません。眼前に見たイエス様の死が彼を変えました。彼は勇敢にも総督ピラトのところに行って、イエス様のご遺体を渡してくれるようお願い出て、許可されました。ご遺体を十字架から降ろして亜麻布で包むと、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めました。新しい墓にこともあろうに十字架で死んだ死刑囚を葬ることが出来たのですから、これはヨセフ自身の墓に違いありません。ヨセフは前もって自分のために新しい墓を購入したものと考えられます。

聖書は、十字架にかけられて死んだイエス

様が3日目に復活されたことを証言しています。しかしこれはあまりにも不思議なことでありまして、昔も今もこれを否定しようとする人がいます。その中にイエス様は十字架上で死んだのではなく、仮死状態だったのが3日目に息を吹きかえしただけだ、というものがあります。しかしイエス様は確かに死なれたのです。だから墓に葬られたのです。

ここで、ヨセフが社会的地位の高い人で金持ちであったことは重要です。ピラトとかけあつたことも、前もって墓を買っていたことも、ヨセフだから出来たことでした。まことに適材適所、天の配剤を思わせます。

ヨセフは神の国を待ち望んでいる人でありました。だからイエス様は神の国を待ち望んでいる人によって丁重に葬られたこととなります。イエス様はその人生の最初から、暴君に命を狙われてエジプトへの逃亡を余儀なくされ、伝道者として立つてからも迫害を受け、それがついに十字架に至るわけですが、生涯の最後に神を信じる人によって丁重に葬られたことは、心に留めておいて良いことです。ヨセフがしたことは世界中で語り伝えられる価値があることと思います。

イエス・キリストは神のみ子であり、神と等しいお方であられましたが、人間となって死を体験、それも最も残酷な死、神に呪われた十字架刑を体験なさいました。けれども丁重に葬られ、今度は陰府へ、死の世界へと旅立たって行かれました。イエス様が葬られた場所にいま光がさしています。

私たちはお墓の前に立つと、悲しみ、嘆き、死への不安、限りある命に対する無力感など、さまざまな感情を禁じえません。お墓が永遠の滅びを表すもののように見えることもあります。そこにいつか、誰もが入って行くのです。けれどもそこにイエス様が、私たちに先んじて入って行かれたことを知るなら、私たちの思いも全く違う姿に変容して行くことでしょう。それは死と滅びのしるしではなく、人生に勝利したという凱旋の記念碑なのです。

(2015年8月12日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊